

容量210トンのメタン発酵タンク。全国から視察が相次ぐ



讃岐うどんで知られる香川県で、2012年に企業や行政などが連携して廃棄うどんを燃料や堆肥に再生する「うどんまのび」循環コンソーシアムが発足した。その後、食品全般に応用できる小型バイオマス発電として技術が確立。食品企業などが個々に取り組める資源循環システムとして注目され、各地で導入が広がっている。



香川・高松市 ちよだ製作所

始まりは香川の うどんから

NATIONAL AGRICULTURAL NEWS

全国農業新聞

2019年(平成31年)

1月11日 金曜日
月4回金曜日発行

廃棄食品使う小型発電プラント

国・県と連携し研究 食品企業などが着目

製造ラインから落ちて製品化されなかったり、ゆでた後時間がたつたうどんは廃棄され、有料で焼却処分される。小麦換算で年間約3千トンの重い負担だ。業者にとって重い負担だ。

そこで、メタン発酵技術を持つ高松市の産業機械メーカー「ちよだ製作所」と国・県の研究機関が研究。廃棄うどんを発酵させてバイオエタノールをつくり、うどんをゆでる燃料にする。どこでも、残りの残さば液として小麦の栽培に使う「循環システムが実現し、コンソーシアムが立ち上がった。

だが、廃棄うどんからエタノールになるのは1割で、火力も弱い。残りの排液を肥料として使うには限界があり、処理にも規制がある。

製造ラインから落ちて製品化されなかったり、ゆでた後時間がたつたうどんは廃棄され、有料で焼却処分される。小麦換算で年間約3千トンの重い負担だ。業者にとって重い負担だ。

そこで、メタン発酵技術を持つ高松市の産業機械メーカー「ちよだ製作所」と国・県の研究機関が研究。廃棄うどんを発酵させてバイオエタノールをつくり、うどんをゆでる燃料にする。どこでも、残りの残さば液として小麦の栽培に使う「循環システムが実現し、コンソーシアムが立ち上がった。

だが、廃棄うどんからエタノールになるのは1割で、火力も弱い。残りの排液を肥料として使うには限界があり、処理にも規制がある。



40世帯分の日量600キロワットを発電

多いため、エタノールの製品化されなかったり、ゆでた後時間がたつたうどんは廃棄され、有料で焼却処分される。小麦換算で年間約3千トンの重い負担だ。業者にとって重い負担だ。

そこで、メタン発酵技術を持つ高松市の産業機械メーカー「ちよだ製作所」と国・県の研究機関が研究。廃棄うどんを発酵させてバイオエタノールをつくり、うどんをゆでる燃料にする。どこでも、残りの残さば液として小麦の栽培に使う「循環システムが実現し、コンソーシアムが立ち上がった。

だが、廃棄うどんからエタノールになるのは1割で、火力も弱い。残りの排液を肥料として使うには限界があり、処理にも規制がある。

製造ラインから落ちて製品化されなかったり、ゆでた後時間がたつたうどんは廃棄され、有料で焼却処分される。小麦換算で年間約3千トンの重い負担だ。業者にとって重い負担だ。

そこで、メタン発酵技術を持つ高松市の産業機械メーカー「ちよだ製作所」と国・県の研究機関が研究。廃棄うどんを発酵させてバイオエタノールをつくり、うどんをゆでる燃料にする。どこでも、残りの残さば液として小麦の栽培に使う「循環システムが実現し、コンソーシアムが立ち上がった。

だが、廃棄うどんからエタノールになるのは1割で、火力も弱い。残りの排液を肥料として使うには限界があり、処理にも規制がある。



人口当たりのうどん店数が全国平均の3倍を超える香川は日本の「うどん県」